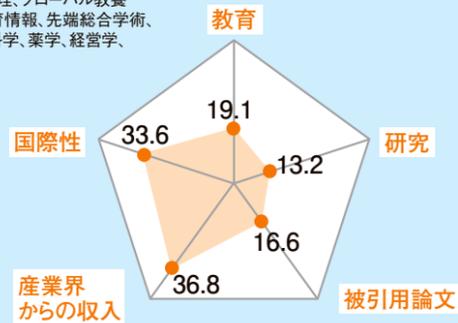




学生数/約35600人
 学部/法、産業社会、国際関係、文、映像、経済、スポーツ健康科学、食マネジメント、理工、情報理工、生命科学、薬、経営、政策科学、総合心理、グローバル教養
 大学院/法学、社会学、国際関係、文学、映像、言語教育情報、先端総合学術、経済学、スポーツ健康科学、理工学、情報理工学、生命科学、薬学、経営学、政策科学、人間科学、テクノロジー・マネジメント
 研究所/6研究機構、14研究所、31研究センター

指標	スコア	順位	参考データ
総合	10.7-22.1	1001+位	ST比率/18.3
教育	19.1	801-1000位	
研究	13.2	801-1000位	留学生の割合/6%
被引用論文	16.6	1001+位	
産業界からの収入	36.8	801-1000位	女男比/35:65
国際性	33.6	801-1000位	



取り組み

- ▶ 教育：大学院と研究機構を核とした若手研究者育成
- ▶ 研究：全学横断組織である研究部が研究をワンストップ支援

	教育	研究
教員	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 「専門研究員プログラム」を設けて、博士学位取得後7年未満の者などを研究機構で雇用。 ▶ 期間中の授業等が免除され、研究または調査に専念できる「学外研究制度」に、若手(39歳以下)、ワークライフバランス(育児/介護休業などにより学外研究ができなかった者)などの枠を設定。 ▶ 研究に専念できる「研究専任教員制度」あり。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 研究者グループの申請により「研究センター」の立ち上げが可能。若手研究者の参加を推奨。 ▶ 全学横断組織の「研究部」で、研究者支援などをワンストップで実施。学際的な研究の推進も支援。 ▶ 「立命館グローバル・イノベーション研究機構」を設立し、社会課題に挑戦する研究を全学で推進。 ▶ 科研費の申請件数、採択率の向上のため、申請者対象の書き方セミナーや準備資金支援などを拡充。
学生	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 若手研究者が、学部生や大学院生などに昼休みの30分間を使って自分の研究をプレゼンする「ライスボールセミナー」を2007年から全キャンパスで週1回実施。参加者には、おにぎり(ライスボール)が振る舞われ、双方向で活発な議論を展開。 ▶ 運搬や清掃ロボットの実証実験などをキャンパス内で実施。学生がキャンパスの中で最新の研究に触れる機会を増やし、知的想像力を刺激。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 大学院生のキャリアパス形成支援を一体的に行う「大学院キャリアパス推進室」を2013年度に設置。課外プログラムとして、英語のライティングスキルや学術英語運用能力、プレゼンテーション能力を高めるセミナーを無料で実施。

注目! 研究が見える、体感できるキャンパスづくりが進む

立命館学園では、2030年に向けた「学園ビジョンR2030—挑戦をもっと自由に」の政策目標の一つに、「未来社会を描くキャンパス創造」を掲げている。その実現に向けて本年5月には、びわこ・くさつキャンパスにて、運搬ロボットや清掃ロボット等を実際に稼働させる実証実験を提携企業と共同で実施。ロボットなどを活用した次世代型の施設運用管理モデルの構築という研究面の狙いとともに、最先端の研究成果を学生が体感できるキャンパスづくりを推進。学生の知的想像力を刺激し、未来の研究者を育成するという教育面での効果にも期待している。

▶ ロボットを利用した学内物流の実証実験。日本初上陸の「Marble」は自律走行で荷物を運搬



◀ 人を追従する運搬ロボット「EfiBOT」は最大300kgの荷物を運べる

Case Study

社会課題の解決に全学で挑戦 学問横断型の研究を推進

立命館大学

学問分野の枠を越え、社会課題の解決に挑戦することで、未来社会に適応した研究大学をめざす。

トップ・ボトム両面から横断的な研究を推進

今、社会が大学の研究に期待する役割は、個々の専門分野の研究を束ねて現代の課題を俯瞰し、解決の方向性を提示することです。昔は、大学にアクセスしなければ専門的な知識などを得ることはできませんでした。しかし今は、ネットがあれば誰もが先端的な知識や専門家本人に直接アクセスできる時代。大学の存在意義や知のあり方が、社会の変化とともに変わってきているのです。こうした変化をふまえて本学は、トップダウンとボトムアップの両面から、社会課題の解決に挑戦する学問横断的な研究を推進しています。トップダウンでテーマ設定とメンバーを選定し、持続可能な社会形成のための課題解決に学部

枠を越えて取り組んでいるのが、*1立命館グローバル・イノベーション研究機構*です。2016年度からの第3期では、「少子高齢化に対応する生命力と創造性あふれる人間共生型社会モデルの形成」に向けて、*25つの研究拠点づくりを進めています。

一方、ボトムアップによる研究推進のしくみが「研究センター」です。研究者本人が学部やキャンパスを越えてメンバーを募り、設置を申請し、許可されれば最長で10年の研究が可能です。ゲームやサステイナビリティ学などをテーマにした、学際的でユニークなセンターが生まれています。

共同研究を進めるうえで、科研費などの外部資金の獲得は欠かせません。本学では、全学横断組織である「研究部」が科研費の申請や管理などを専門的に手厚くサ

ポートしています。直近の10年間で科研費の採択件数は約1.9倍、配分額は約1.6倍に伸びており、それぞれ私立大学の中では、*34位と3位です。外部資金の獲得に向けた積極的なチャレンジは、研究力の底上げにつながります。今後も、挑戦する人を強力に支援する考えです。

人的ネットワーク拡大と研究者育成が課題

学内の連携を核に、研究者の人的ネットワークを拡大し、研究の多様性を高めていくことが今後の課題です。

それにはまず、海外の研究者とのネットワークづくりが不可欠です。研究成果等の発信とそのフィードバックの受信を母国語で行える、国際的な*4オンライン

ラットフォームに本学も参加しています。母国語での交流が、海外の研究者と関係を構築する際のハードルを下げ、ネットワーク拡大を促すものと考えています。自学で研究者を育て増やすことも大切です。大学院生に対しては、充実したキャリアパス形成支援プログラムをすでに備えています。問題は、研究者をめざす学生をいかにして増やすかです。「未来社会を描くキャンパス創造」に取り組む中で、「研究の見える化」を進めていき、学生にとって研究が身近なものになり、大学院進学を志す学生が増えることを期待しています。

本学は、THE世界大学ランキング200位台を目標にしています。今後も目標を高く保ち、自由な発想による挑戦をためらうことなく推進していきます。



学術部長 松原洋子

まつばらようこ ● 1998年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了。同研究科助手、三菱化学生命科学研究所特別研究員を経て、2002年立命館大学産業社会学部教授、同大学院先端総合学術研究科研究科長、人間科学研究科所長、衣笠総合研究機構長などを経て2019年より現職。専門は科学史、生命倫理学。

取材・文/児山雄介 撮影/谷口哲

*1 Ritsumeikan Global Innovation Research Organization. 略称はR-GIRO(アールジャイロ)
 *2 「若者が夢を持つ社会の形成と新しい文化の創造」[自然共生型社会モデルを支える科学・技術]「労働環境の刷新による生産労働者の活性化」[高齢者の生きがい・生産労働]「地球規模での人間・社会の成長と持続」
 *3 「平成30年度科学研究費助成事業の配分について」より
 *4 「Meridian180」。翻訳アシスタントを介在させることで母国語での政策提言・研究成果発信を可能にしている